

記憶に向きあう強さについて

参加型システム研究所 理事長

神奈川大学名誉教授 橘川 俊忠

カズオ・イシグロの警告

昨年末、ノーベル文学賞受賞式のニュースを見ていたら、受賞者のカズオ・イシグロのインタビューの一部が紹介されていた。そこでイシグロは戦後日本の社会状況について、「日本は忘却することによって、平和・民主主義・安定を実現してきた。しかし、その日本は記憶に向きあう強さを獲得しえているのだろうか」という趣旨の発言をしていた。忘却されたものが何か、どのように忘却されたのか、呼び覚まされるべき記憶とは何か、ということについてイシグロは文学者らしく直接語っているわけではないが、その発言には、無視しえない重大な問題提起が含まれているように感じた。

彼の最新長編小説とされる『忘れられた巨人』では、その「忘却と記憶」の問題が描かれている。アーサー王亡き後のブリテン島、そこは竜の吐き出す毒気が霧となって蔓延し、その毒気によって人々は記憶を失っていく。遠い所に住む息子に会うためにある老夫婦が旅に出る。途中で少年や戦士と道連れになり、一緒に旅をしながらその竜と戦うことになる。その戦いは、失われた記憶、よいことばかりではなく嫌なこと、悪いことも含む記憶を思い出させる。その記憶に、恐れを抱きながらも向きあっていこうとする老夫婦の姿が誠実に描かれる。

無料を承知の上で、この物語を寓話として読み解いてみよう。まず、竜は国家のメタファーである。ホップスの『レヴァイアサン』には巨大な竜の挿絵が入っていた。国家は、時として歴史を改ざんし、国家の「汚点」とされるものの忘却を促進しようとする。そういう雰囲気がかつて社会的に醸成されるとき、記憶を維持し、国家に抗うことは相当の覚悟を要求される。自国第一主義が蔓延する世界は、まさにそのような竜が跋扈する世界であろうし、日本はその中の一匹の竜になりつつある。また、忘却は時間の経過のみによって進むのではない。思い出そうとする、記憶にとどめておこうとする意志の欠如によっても促進される。記憶、それも辛い、時には自己に不都合な事実の記憶を喚起し続けることには、イシグロのいう「強さ」が必要であろう。

サーロー節子の強さ

ノーベル文学賞の授与式の日、平和賞の授与式も行われた。その授与式の記念講演に立ったサーロー節子の言葉も強く記憶に残るものであった。サーローは、自らの壮絶な被爆体験を「(四歳のおいの)小さな体は、何者か判別できない溶けた肉の塊に変わってしまいました」という短い言葉に込めて語った。人は極限の悲惨に直面したとき、言葉を失うという。そして、消そうとしても消せないその記憶を言葉にすること自体に強い拒否反応が生じるという。多くの被爆者や沖縄戦の体験者たちが、長い間沈黙を強いられてきたという事実が、言葉にすることの困難さを示している。その困難さを想像するとき、彼女の短い言葉に肅然たる思いを禁じ得ない。

サーローは、そうした困難、苦しさを乗り越えて言葉を発し続けている。そして、あるドキュメンタリー番組で見た彼女は「日本軍がかぞえきれないほどの同朋を殺したことについてどう思うか」という中国人留学生からの厳しい質問に苦悩しつつも極めて真摯に答えていた。だからこそ「あきらめるな。光が見えるだろう」という彼女の言葉が重みを持つ。記憶を握りしめ、それに真正面から向きあう強さを、サーローは確実にはぐくんできたのであろう。

霧の向こう側を見よ

ところで、イシグロもサーローも日本に生まれ、現在は外国に暮らす日系人である。その二人が、ノーベル賞授与式の舞台に同日に立っている。そして、どちらも記憶の問題に深くかかわっている。これは、偶然とは思われない。忘却の国日本を離れて、異郷に暮らしていることが二人の記憶への対し方に何らかの影響を及ぼしていると考えても間違いではあるまい。日本という同質性が高いといわれる社会に無自覚なまま暮らしていると、竜の吐く忘却の霧を吸い込んでしまっているのかもしれない。せめて、霧の向こう側を見通そうという意志だけでも共有したいと思いつつ新年を迎えた。

(きつかわ としただ)